
手のひらの上

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手のひらの上

【Nコード】

N6202D

【作者名】

こっこ

【あらすじ】

勇んで家出をした少年の、くすつと笑える結末。シュンくん、それでホントにいいの？ 某所で提出した掌編です

「ママなんか、大っきらいだ!」

大きな声でそう言うと、シユンは大好きなリュックを棚からひったくった。だいじなアイテムをいっぱい詰める。ゲーム、お菓子、小さい人形その他いろいろ……。

それからばたんと大きな音を立てて、ドアを勢いよく閉めた。

門を出て、四つ角を曲がって、いつもの空き地も過ぎて。

途中で後ろを振り返ってみたけど、ママは来ない。

(ほら、やっぱり!)

ボクのことなんか要らないんだろうと、シユンは思った。

どんどんどんどん歩いていく。

ちよつと遊んでたくらいで怒られる家なんて、ないほうがいい。お腹がすいたら、お菓子を食べればいい。とってもいっぱい持ってきた。

どこか秘密基地をつくって、そこで寝ればいい。きっと家より気持ちいいはず。それに宿題とか片付けとか、いろんなこと言われなからですむ。

そうやって考えながらずっとずっと歩いて、気がつく知らない公園の前にいた。

「うわぁ……」

思わず声をあげる。

ぐるぐる回る大きなすべり台は、降りるところが二つもある。

丸太を組んで作った高くそびえる台からは、ターザンみたいに口
ーブにぶら下がって、降りていけるヤツまである。

他にも大きな砂場、迷路、ブランコ、名前を知らない面白そうな
もの……。

「ねえ、ボクにもやらせて！」

「いいよー。じゅんばんね」

遊んでいた子たちに声をかけて、入れてもらって、いつしよにな
って走り回った。

かけっこ、鬼ごっこ、登ったり降りたり転がったり、息が切れて
もまだ遊ぶ。

「おまえ、名前は？ どっから来たんだ？」

「シュンだよ。ボク、家出してきたんだ！」

「すげえ！ 家出とかカッコいいじゃん」

みんなが目を丸くして自分を見つめて、シュンはちょっと得意に
なる。

家出したボクが、いちばんすごい！と。

でもそのうち……みんなが騒ぎはじめた。

「ヤバイよ、雲、真っ黒だもん」

「なんか、カミナリなってる？ あたし帰るね」

遊んでいる友だちが減っていく。

だんだん公園がさみしくなる。

ぽつんと冷たいものが、シュンの顔に落ちた。

「ふってきたーっ！」

わっと誰もが走り出す。

「ひゃー、ぬれるぬれる」

「またねっ！」

たちまち公園から、子どもたちの姿が消えた。

（どうしよう……）

家出てきたシュンには、帰るところがない。そもそも、帰り道が分からない。

ともかく濡れないようにと、シュンは丸太で組まれた遊具の中に逃げ込んだ。

雨がだんだんひどくなってくる。

しかもカミナリが、すごい音で近づいてくる。

（こ、こわくないやい！）

強がってみたそのとき、けたたましい音を立ててカミナリが落ちた。

「ひっ……」

文字どおり縮み上がる。

怖い怖いコワイ。やっぱり怖いものは怖い。お菓子もゲームも持ってきたけど、カミナリなんて考えなかった。

半べそで、隠れ屋の隅にうずくまる。

そのとき、声がした。

「あー、いたいた」

聞きなれた声。

「あーもう、おかげで濡れた濡れた」

いちばん聞きたかった声。

「ママっ！」

よっこらっしょつと言いながら、入ってきたママにすがりつく。

「ママ、カミナリ……ひゃう」

ちょうど雷がゴロゴロと鳴って、思わずおかしな声が出る。

「ばっかねー、雨降りそうなのに、家出なんかするから」

それは何か違うと一瞬思ったが、また鳴ったカミナリに、考えは吹き飛ばされた。

「ママ、どうしよう……」

「そのうちやむでしょ」

「やまなかったら……？」

「そのとき考える」

やっぱり何か違う気がしたが、それよりも安堵のほろがまさった。すりすりと、ママにくっついてみる。

そしたらちゃんと軽く、おでこを弾かれた。

「でもママ、どうしてここ、分かったの？」

「こ・れ・よ」

笑いながら、ママがケータイを出した。

「あんだ、自分の持って出たでしょ」

「あ……！」

そうだった、とシユンは思い出す。最初にだいじなものをリュックに詰めたとき、確かにケータイも入れたのだ。

だってあれは、友だちはまだ持ってない、自慢のアイテムだったから。

「便利よねー、これ」

「うん」

シユンの子供用ケータイは、親のケータイとリンクしてある。だから簡単な操作で、今どこにいるかがすぐ分かる。

なのに今日は、すっかりそのことを忘れていた。

ママが追いかけてこなかったのは、最初からケータイを持ってるのに、気づいてたからだろう。

「ボクこんど、ケータイ持たないで家出しようかな……」

「そしたら、さらわれたときどこにいるか、分からないけど？」

それは困る。

今日みたいに迷子になったときに、探してもらえないのもやっぱり困る。

家出するならケータイはあったほうがいい、そうシユンは思った。

「で、どうすんの？ 家出続ける？」

「やめとく……」

今だってこんなに怖いのに、夜になったらと思つとぞつとする。

「じゃ、雨やんだら帰ろうか」
「うん！」

シュンは元気よく答えた。

（後書き）

拙作を読んで下さって、ありがとうございました。本家はライトノベルですが、たまにこういうのも投稿すると思います。良かったら、連載中のものも読んでみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6202d/>

手のひらの上

2010年12月11日03時01分発行